

特別支援学校における地域への相談支援の在り方 VI

—相談部事業報告—

田口悦津子 安永啓司

I はじめに

相談部は2003年度の創設から数えて今年度は9年目となった。専任1名、兼任1名の体制は昨年度と同じである。創設以来、学齢以降の相談を専任が、就学前の担当を幼稚部との兼任者が行ってきたが、2009年度以降、それまでの就学前担当者が幼稚部を離れ相談専任となったため、幼稚部との兼任者が就学前の相談を担当していないという一種のねじれ現象のようになっていた。今年度は、創設当初のように幼稚部兼任者が就学前の相談を担当できるように、分担を改めた。件数としては、1年間に150件を越える相談を受け付けた。これは昨年とほぼ同じ件数であり、件数的には現在の体制では上限と思われる。昨年度と比較すると、電話・メール相談、特に、面接相談の件数が減り、代わりに巡回相談の回数が増えている。以下、IIでは今年度の相談部の各事業について報告し、IIIでは幼児就学支援事業について述べる。

II 各事業についての報告

1 2011年度の実施事項

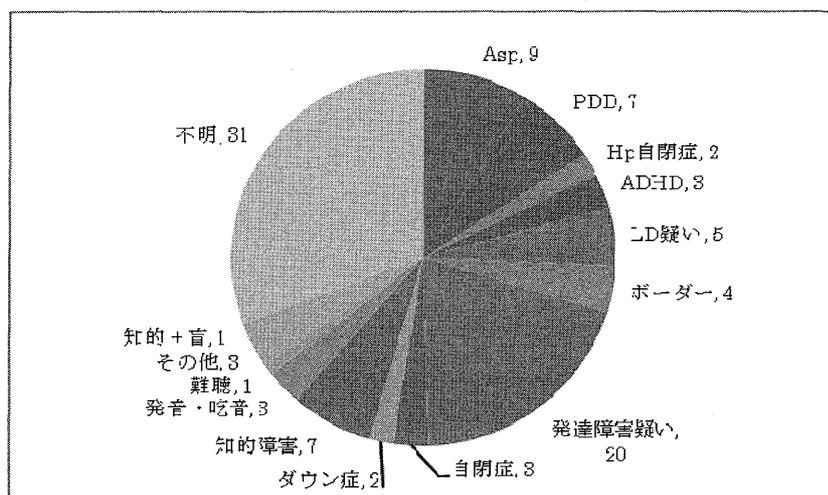
相談部の事業として、電話相談、メールによる相談、面接相談、巡回相談、研修会等への講師派遣を実施した。また、校務分掌の幼児就学支援事業として、相談部・幼稚部・小学部担当者でさらさらグループ指導を実施した。以下、各事業についての概略を報告する。

(1) 電話相談・メール相談

電話相談は95件を受け付けた。昨年とほぼ同じである。電話をかけてきた相談者は対象者の母が74人(78%)保健師・相談員8人(8%)教員4人(4%)父・周囲の支援者・本人がそれぞれ3人(3%)であった。相談対象者を学年別に示したものが、表1である。就学前と中学校進学控えた小学校高学年から中学2年が多い。就学前後、中学校進学前後が多い傾向はここ数年続いている。5歳児の学年は保育園からの紹介、中1・中2の学年は学校からの紹介で保護者がかけてくるケースが多い。また、今年度は成人の保護者や本人からの相談も昨年度、一昨年度に比べさらに増えた。また、相談者が語る対象者の障害名、診断名はグラフ1の通りである。ここ数年の傾向であるが、発達障害と思われるケースがかなりの割合を占めている。

表1 電話相談学年別ケース数

学年	～	2	3	4	5	小	小	小	小	小	小	中	中	中	高	高	高	～	成
	2		歳	歳	歳	1	2	3	4	5	6	1	2	3	1	2	3	20	人
			児	児	児														
件数	1	9	2	7	13	1	6	4	4	6	5	10	8	3	4	2	1	0	9



グラフ 1

メールでの相談は7ケースほどあった。そのうち3ケースは保護者からの相談（対象は幼児2ケース、小学生1ケース）であった。残りの4ケースは発達障害と思われる成人本人からの相談であった。成人本人からの相談が増えている点は、電話と同様である。

（2）面接相談

面談による相談を39回（29ケース）実施した。回数としては昨年度と比べると20回ほど減少している。対象は幼児が12ケース、小学生4ケース、中学生12件、高校生以上が1ケースであった。幼児のケースは年長児の就学に関する相談が多く、後述する就学支援グループに繋がるケースが多い。学齢以降では学習不振、困難についての相談内容が多く、昨年度と比べると中学生の割合が増えている。

（3）巡回相談

1）就学前の巡回相談

今年度も支援地域を東久留米市内と指定して巡回相談を行った。2006年度から東久留米市保育課から巡回相談の依頼があり、それを受けて今年度も継続して行っている。市立保育園10園を巡回した。各園3回以上のべ35回実施した。午前中に対象幼児の様子や保育の観察をし、午後の午睡中に園長、主任、看護師、担当保育士との話し合いの時間を設けた。対象幼児の課題や目標、支援方法の確認等を行った。その他私立保育室1園へ1回訪問した。

また、市内の私立幼稚園1園から依頼があり、定期的に訪問し計7回巡回相談を実施した。対象幼児の課題や目標の、支援方法の確認や就学に向けての課題の確認のために保護者面接を実施した。

2）学齢期以降の巡回相談

市内小・中学校の依頼により、小学校8校のべ47回、中学校3校のべ16回、高等学校2校のべ11回実施した。その他、ケースにより学童保育所、養護施設を訪問した。巡回相談の内容としては、児童生徒の観察と見立て、支援の具体的な方法についての確認を各担任、校内コーディネーターに助言をする。また、校内の支援会議、ケース会議などに参加したり、保護者が

外部の第三者と面談希望がある場合、各学校の要請により行った。さらに、今年は本校相談室内だけではなく、巡回先の学校でWISC検査を実施した。これは、保護者の了解があり、検査を受けたいが保護者が支援・相談機関に子どもを連れていけない事情がある場合に限っている。検査実施後、報告書にまとめて保護者や担任に説明し渡している。今年度は特に、都立清瀬特別支援学校の地域支援コーディネーター、東久留米市のスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーと連携・協働するケースがあった。市内の教育相談室へ保護者が出向けないケースなどについてWISC検査を実施し、その後の支援の資料とした。

今年度の巡回相談では、上述したが他機関との連携が進み、チームで巡回をしたり、支援会議の中で、各機関の役割を確認しそれについて実行したりするなど、連携・協働するケースが昨年度よりさらに増加した。

3) 研修会講師

今年度も研修会を6件引き受けた。教育委員会から初任者研修、特別支援学級の担任研修会の依頼があり、本校の教材や支援方法などを紹介した。各学校からは、夏季研修会として「個別ケースから学ぶ」テーマでの依頼があった。

以上、相談部の各事業について概略を報告した。昨年度も記したが、現在の人員体制では各事業ともに件数的には上限に近いと思われる。そういう意味においても、来年度はさらに、東久留米市のスクールソーシャルワーカーや教育相談室の心理職との連携や、都立のセンター校である清瀬特別支援学校地域支援部との連携・協働などが予想され、重要となると思われる。

Ⅲ 幼児就学支援事業

1. 幼児就学支援事業の変遷

相談部の関連事業として実施している幼児就学支援事業についてまとめる。

地域の乳幼児の相談に関して、本校は1994年度より大学と連携して発達障害相談室を設置し、地域の乳幼児の相談を受けてきた。また、相談に訪れた幼児に対して、本校幼稚部での体験学習と大学の専門領域研究教員による親子の個別面談指導を含んだ「発達障害グループ指導」を行ってきた。その後、2003年度からはこの年に発足した相談部を中心に地域支援を行っている。2004年度からは、前述したグループ（きらきらグループ）に加えて、発達障害の幼児を対象としたさらさらグループが立ち上がり、校内研究の一環で指導を行ってきた。2008年度からは校務分掌として幼稚部、小学部、相談部の教員で担当することとなった。今年度からは、幼稚部の体験学習を中心としたきらきらグループが、よりオープンな参加型の「幼稚部きらっと体験」に衣替えをし、現在に至っている。グループはともに大学院の授業のフィールドや学生のボランティア体験の場となっており、学生が幼児と関わりながら保護者対応などを学ぶ場となっている。グループ指導は、大学の附属学校という本校ならではの特徴を活かした事業である。

2. 就学支援グループ「さらさらグループ」について

2011年度の事業報告でも述べたが、現在では、電話、メール、面談の相談は発達障害に関するものが多い。数年前は発達障害に関しての相談支援機関が少なかったために、本校相談部に

も発達障害の可能性がある幼児の相談件数が急増したことや、特別支援教育への転換を受けて本校が地域のセンター的機能を模索していたこともあって、2004年このさらさらグループは誕生した。今年度で8年目、OBたちは40名となった。約8割が地域の通常の学級で学んでいる。

(1) さらさらグループの目的と対象

「集団になじめない」「友だちとうまく遊べない」等幼稚園・保育園に在園の特別な支援を必要とする年長幼児を対象としている。グループ開始当初は、我が子への支援の必要性に気づいた熱心な保護者が、自ら探して本グループへの参加を希望されていたため、広域から幼児達が通っていた。ここ2～3年は、本校相談部が東久留米市の保育課から委託されている保育園の巡回相談や市の保健センターからの紹介で保護者が申し込みをされる場合が多くなり、本地域に密着した活動となっている。このグループの目的は、対象の幼児達に「小グループでの楽しいゲーム遊びを通して人と関わる経験を増やし、社会性を育てること」と幼児・保護者双方に「就学準備の体験や情報を提供する」ということである。

(2) さらさらグループ活動内容

ープレ学校体験とみんなでゲームで社会性を育てるー

本グループの活動は6月から翌年3月まで、月1回(年間9回)水曜日の午後3時から5時まで本校の幼稚部棟で行われる。幼児達は午前中は在園の幼稚園・保育園に登園した後、本グループに参加する。スタッフは本校の相談部・幼稚部・小学部の教員計6名と本学の学生ボランティア5名である。グループの時程と活動の内容は表1の通りである。小学校の教室のように机が配置された環境で、幼児達は来校すると、まず、自分の座席を探しそこで出席ノートづくりをする。その後、自由に遊ぶ時間を経て、全員が揃う頃に「おはなしタイム」が実施される。この時間は、毎回あるテーマについてみんなに話をする時間であり、小学校の朝のホームルームを模した活動である。このように、幼稚園・保育園とは大きく異なる「学校」という環境を事前に体験させる目的で、「プレ学校体験」を本グループの活動の中に数々設定をしている。プレ学校体験の内容は表2を参照されたい。

	幼児の活動	保護者の活動
3:00	出席ノートづくり 自由あそび	参観
3:30	おはなしタイム みんなに話そう きょうのうた	参観
4:00	みんなでゲーム	懇談会
4:30	おやつタイム 自由あそび	
5:00	かえりの会・解散	担当の教員と話す

「おはなしタイム」の次は「みんなでゲーム」である。これは小集団でのゲーム遊びを通してソーシャルスキルやコミュニケーションスキルの向上を期待して設定している(ゲームの内容は表3参照)。初回の6月から第4回10月まではボーリングや黒ひげ危機一髪ゲームなど、主に個人戦となるゲームを行う場合が多い。それ以降は個人戦であるが動きの激しいゲームやチームを組んで友だちと協力するゲームなどを、その年度の幼児の実態に合わせて行っている。また、毎回最後のゲームとしてお菓子取りゲームをする。中身がわからないように包装したお菓子をくじ引きで当てるゲームである。当たったものがおやつタイムのお菓子となる。お菓子は全部異なり、好きではないものが当たる場合もあるし、友だちの当たったお菓子の方が食べたい

場合もある。このように葛藤が起きる場面をあえて設定し、友だちと交換したり、分けてもらったりするようなやりとりが起きることを期待している。

年が替わり、就学が目の前に近づく1月第7回からは、本校の本校舎の体育館や音楽室を使用して、教室を移動することや体育や音楽の授業を体験する時間を設定した。

新しい環境に戸惑い、慣れることに時間がかかるであろう幼児達だが、事前に同じような活動を体験していることで、小学校での様々な活動に前向きに臨んでいくことができるのではないかと考えている。

<p>◎教室環境を使った体験（6～3月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ○出席ノートづくり ・黒板の文字・数字を写す ○おはなしタイム ・個人机とイスに慣れる ・起立・着席 机の中からものを出す・しまう ・先生、友だちの話を聞く。 ・みんなの前で話す、質問する ・自分の分の紙を取って後ろの人にまわす ・配られた資料を見ながら先生の話聞く ・多数決：選択肢からひとつ選んで手をあげる <p>○ずこうタイム（12・1月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・机上スペースで作業をする <p>◎学校環境を使った体験（1月～3月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チャイム着席・整列・教室移動・学校探検 ・特別教室で授業を受ける（おんがく・たいいく） ・体操服に着替える ・そうじ

ゲーム	予想される負荷	期待されるスキルと支援のポイント
ボーリング	勝敗・得点・順位・順番	順番の理解 勝敗の受け入れ
黒ひげゲーム	順番・偶然性・不安・驚き	順番の理解 不安驚きへの対処
お買い物	聴覚記憶・店員とやりとり	記憶の方法・買い物スキル
お菓子とり	偶然性・期待はずれ	交換交渉スキル
しっぽとり	ルール・不安や恐れ・勝敗	不安への対処・状況判断
ボール運び	二人組・ルール・協力・共同	会話・交渉・ルール理解 協調性
ジェスチャーゲーム	二人組・ルール・協力・注目を集める	会話・交渉・ルール理解 協調性・勝敗の受け入れ

（3）もう一つの支援の柱 保護者への支援 —懇談会で支え合って—

さらさらグループの幼児は前述したように特別な支援を必要としている。周囲の人々から「変わった子」と見られたり、親のしつけの問題として捉えられたりすることも多く、保護者はどのように我が子や周囲の人々に対応しているのか戸惑い、孤独感を感じる人が多いと言われている。また、幼稚園・保育園では通園施設や療育機関と比べて就学の情報を得る機会が少なく、保護者は不安を感じがちであると思われる。そこで、本グループでは、幼児への支援とともに、保護者への支援を実施している。スタッフが就学について情報提供をしたり、保護者同士で情報交換したり、相談し合える懇談会を設定している。保護者はグループ前半は幼児達の活動を参観し、後半は毎回、別室でお茶を飲み、懇談会に参加する（保護者の活動の流れは表1参照）。6月初回の懇談会はオリエンテーションに始まる。今年度の懇談会のテーマ・内容については表4の通りである。8月第3回は1年生になったOBの保護者から就学前後の話を聞いている。月に1回の実施であるが、回を重ねるごとにお互いの思いをことばに出し合える場となっている（となるようにスタッフ側は配慮しているつもりである）。毎年ほぼこのプログラ

ムで実施しているが、保護者からの要望に応じて、新たなテーマが加わることもある。例えば、WISCⅢの結果の見方については要望があって昨年度から加わったものである。

1) 就学支援シートづくりで支援する

それぞれの就学先が絞られてくる12月、当市学務課から就学支援シートが就学前機関に配布される。市の就学支援シートが出来て3年になるが、本プログラムではそれ以前から、オリジナルの「さらさらグループ版就学支援シート」を作成して、保護者自身が就学支援シートを作成するという実地的なサポートに取り組んできた。在住の自治体にシートがない参加者は現在もこのシートを使っている。保護者は在籍園の担任に記載を依頼し、内容について話し合う。1月、2月の懇談会では、シートの保護者欄に記載するために下書きを書いて、書き方や表現に悩む点について話し合う。また、実際に就学先に渡す方法（誰にどのように渡すか）なども話し合う。

このような過程を経る中で、「我が子が小学校生活を円滑に送るための支援を受けることができるように、どのように動けばよいのか」という実地的な方法を保護者自身が学ぶことができる。保護者が積極的に関わることで、各機関の連携がスムーズに図られ、その結果、我が子が順調な小学校生活を送ることができれば、親としての役割に気づくことに繋がるであろう。保護者自身にとっても今後の「親としての支援の求め方」を学ぶ機会になると思われる。

2) さらにG応援団メッセージを添えて

参加の幼児それぞれには担当の教員がいる。担当の教員はその回の幼児の活動の様子を記録し、毎回保護者に伝えることになっている。また、その記録を基に、「応援団メッセージ」を作成する。応援団メッセージは、就学後の支援に役立ててもらえるように、さらさらグループでの活動の様子や就学後予想されることとその支援の方法についてA4一枚にまとめたものである。就学支援シートとともに保護者から就学先の小学校へ渡される。

3) ピアサポートグループとなる場合もある

3月中旬で最終回の活動となるが、9回の活動を通して、幼児も保護者もとても仲良くなる場合が多く、グループの活動の後に食事に行ったり、集まって遊んだりすることもある様子がある。保護者同士の繋がりが深まり、自主的なピアサポートグループとなっている学年もある。

(4) 就学後の支援 —相談部の地域支援の一環として—

2004年度のグループ創設当初は広域から参加者が集まっていたため、就学後、就学先に直接訪問して支援をすることが難しい状況であった。一学期終了後に、アンケートとして、小学校での子どもの様子や支援の状況等を尋ね、ニーズに応じて保護者や担任の相談に電話で応じる場合が多かった。

また、例年、8月の下旬に第3回の活動をOB会として設定している。活動の内容としては、新一年生と現役メンバーと一緒にゲームをする。OB会の目的は前述したように、現役生の保護者にOB保護者から就学前後の話をしてもらおうことにあるのだが、OBの学校での様子や課題等を保護者から個別に直接伺うOB支援の機会としても捉えている。主に市外の参加者に対しては、このような機会を利用して支援をしてきた。

ここ数年は市内の参加者が多く、相談部の地域支援事業の一環として就学後の支援に直接関

ることができるようになった。例えば、現在一年生（昨年度の参加者）の場合、市内の小学校へ就学した5名全員について、就学後の学級での様子を参観させてもらうことができた。

＜A君のケース＞

A君のケースを紹介する。A君の保護者は市の就学相談を申し込み、さらに自らが就学支援シートを学校に持参して支援の必要性を説明していた。学校側もその点を考慮したクラス編成

6月	○オリエンテーション（グループの目的 自己紹介） ○就学について ・就学にあたって 特殊教育から特別支援教育へ ・就学相談とは 学校いろいろ（定員・教育課程の違い）
7月	○就学相談について（実際に何をやるの？） ・保護者面談 行動観察 心理検査（知能検査、発達検査）・医学診察 学校見学 体験
8月	○OB会 ・OB（1年生）の保護者から話を聞く
10月	○我が子を見つめよう ・我が子の成長発達の様子を振り返る ・行事等への参加の様子を通して振り返る ○就学相談、見学、体験等の情報交換
11月	○就学時健診を終えて ・各自の報告 感想 情報交換
12月	○現況報告・各自の報告 感想 情報交換 ○就学支援シートについて
1月	○就学までに体験させたいこと ○WISCⅢの見方 ○就学支援シートの書き方について
2月	○就学支援シートを書いて思うこと ○就学支援シートの渡し方
3月	○就学支援シートを渡して思うこと 卒園式・入学式について ○小学校へ期待すること ささらグループに参加して

やベテランの教員を担任にするなどの配慮をした。就学前の予想通り、ことばだけでは担任のクラス全体への指示が正確には理解しにくいA君であるが、担任の様々な配慮（「視覚的な補助を用いて説明する」「個別に声をかける」）があるので、元気に楽しく学校に通っている。

算数は得意で、計算が早く、自分でも自信をもっている。巡回相談で、A君が明るい表情で算数や体育の授業に参加する様子を参観させてもらった。また、彼の個別のファイルから、保護者が作成した就学支援シートと本グループが作成した応援団メッセージを見つけた時は、本グループの取り組みが、A君の就学移行支援の一助になっていることを実感した。また、A君の保護者からは学期が終わるごとに、彼の学校での様子等、嬉しい報告がある。

グループ参加者全員にA君のような移行支援ができることを目指して、今後も特別支援学校の地域支援の一環として、本グループの実践を続けたいと考えている。

文献

東京学芸大学附属養護学校（2004）：養護学校の地域への相談支援の在り方Ⅰ-電話相談等の現状分析と小・中学校の相談ニーズの予備調査から-，研究紀要 Vol.48，101-114

東京学芸大学教育実践研究支援センター（2008）：インクルージョン保育・幼児教育ミニハンドブックⅡ 知的・発達障害のある幼児の就学支援プログラム-学校にうまくいけるように！活動集・14／保護者支援・10